

紺碧のサンクチュアリ

佐鳥 理

空からのやわらかな光が、海底を揺らめいている。レギュレーターから吐き出された星屑みたいな泡の粒が、群れになって漂うノコギリダイのあいだを、まっすぐ立ち上っている。触れることのできる宇宙は海の底にある。初めは出会ったばかりの色鮮やかな熱帯魚に、感激しながら探検をするのだけれど、海に馴染むといろいろな考えごとを始める。青の静寂の中、規則的な呼吸音を聴いているうちに心が無になって、砂漠みたいにかからなかったカラダが、いつの間にか海に溶けていくかんじ。重力からもしがらみからも解き放たれて、無限の広がりを感じる海に心を放つのは、何よりも心が癒される時間だ。わが壮太からハンドサインが送られてきた。わたしは泡のきらめきに包まれて浮上を開始した。海面から顔を出すと、見上げた空は目に

しみるくらい眩しかった。ふたつの青が溶け  
合った地平線を眺めていると、信じられない。  
この透明な水のすぐ下に、もうひとつ世界が  
あるなんて。  
ボートに上がろうと梯子を掴む。押し掛か  
ってくる重力がわたしを現実に引き戻す。ま  
るで、カラダはここにあるのだと、主張する  
ように。マスクをはがし、タンクもウェイト  
ベルトも何もかも外して、わたしはその場に  
へたり込んだ。  
「わたししたぶん、前世は海の生きものだった  
んじゃないかと思うの」  
そのとたん、ウェットスーツを脱ぎかけて  
いた壮太が吹き出した。よく日焼けした肌が  
露わになると、笑顔の口元に覗く歯がやけに  
爽やかだ。  
「ずっと潜っていたいい気持ちは分かるけど、  
もうエア切れだ。今日の探検は終わり。残念  
だけど陸に戻るよ、千波」  
わたしは肩をすくめ、返事代わりにウェッ

トスーツを腰まで下ろす。熱帯の日差しに抱かれていると、あっという間に濡れた肌が乾いてしまう。常夏の島に吹く風は、天国のよう。に優しく、そこにいるだけで心が洗われていく。東京からたった三時間のフライトなのに、ここはまるで異世界のようだ。ボートが発進して、深い海の青に白い足跡をつけていく。わたしはそれを眺めながら、神秘の世界を名残惜しんだ。潜れるのはあと一回。それが終われば、また現実に帰らなくてはならない。この世の終わりみたいに真っ黒なスーツを着て、就職セミナーに参加しているだけで、息が詰まりそうだった。社会人の心構えとして聞かされる話のどれも、人生に対する諦めを諭されているようにしか感じられなかったから。それを、大学に行かせてくれた親のために、当たり前前のように受け入れる人たちは、心から尊敬できるけれど、人生の大半を過ご

そうとする場所で、自分らしくいられないなんて、狂ってる。ダイバーのさがなのか、心が圧しつぶされそうになると、無性に海が恋しくなる。そんなとき、壮太の作ったダイビングショップのブログにたどり着いた。瞬きも忘れるほど、惹き込まれた。海底洞窟に差し込む、海が白くなるほどの光の柱。トルネードのように渦巻く回遊魚の群れ。ためいきがこぼれるような絶景画像の連続。そして、最後に壮太のプロフィールにあった『紺碧のサンクチュアリ』というタイトル。トルネードのついた絵を目にしたとき、これまで見たどんな写真よりも心がざわついた。もし、宇宙は海の底にあるのだと言われても、そのまま鵜呑みにしてしまいなほど、神秘に満ちた絵だった。紺碧の海に漂う、火焰のゆらぎのように赤い尾を引く熱帯魚の群れ。まるでその魚自身に光を放っているようにも見える、まばゆい

赤の重なり。生命の息吹を感じさせる鮮やかなサンゴ礁。海中に漂いながら命を見つめる男性の、慈愛に満ちたまなざしに、恋に落ちそうになった。彼がどれほど海の世界に胸を焦がしているのか、ありありと伝わってくるから。

見つめてみると、言葉に出来ない高揚感に包まれる。左下の几帳面な文字で書かれたサインから、これを壮太が描いたものではないとわかっていくのに、コンタクトをとらずにはいられなかった。

壮太の自宅にあるというその絵を一目見ようと、予定を全部投げ捨てて東京を発ったのが、もう三週間も前の話だ。

「千波、今夜の予定は？」壮太が振り返って訊いてきた。

「まだなにも。夕食のお誘いなら嬉しいけど、ブログの更新も楽しみにしてるんだよね。昨日さぼったでしょう」

「昨日はいろいろと準備があった。来るんだ、

清孝が夕方の便で「

うそっ」

わたしが空に響くほど声を張り上げると、  
壮太が弾かれたように笑った。

「清孝の話になったときの、千波の目」

当然だ。わたしが心を奪われた、紺碧のサ  
ンクチュアリを描いたのが、清孝という人な  
のだから。

「とにかくあとで迎えに行くよ。会った瞬間  
に卒倒しないように、心の準備だけはしっか  
りとしておいて」

「ねえ壮太。もしかして、わたしのために彼  
のこと呼んでくれた？」

自惚れるなというように、わざとらしい呆  
れ顔をつくった壮太を見ていたら、自分のハ  
イテンションがなんだか恥ずかしくなっ  
てきた。

「それで、何時？」

わたしはできるだけ平静を装って、そう訊  
いた。

午後六時。わたしが壮太に連れて行かれたのは、その場所を知っている人でなければ、まず通らないような細い路地にある、テーブル八席とカウンターからなる、家庭的な雰囲気。気の居酒屋だった。

清孝が先に来て、いちばん奥の席を押さえ、てくれていなかったら、きっと会話もままならなかっただろう。店内はわたしたちが訪れて間もなく満席になり、テーブルを横断して陽気な声が飛び交っている。

「千波は強運持ちだよな。天気をひっくり返して風を止めるし、大物との遭遇率も高いしね。マンタの少し前はバラクーダか」

壮太はテーブルの中央に置いたスマートフォンで画像を表示させた。一緒に潜ったときに撮ったデータを落としてきたようだ。

「わたし、あんな大型魚の群れを見られるなんて思ってもいなかった。やっぱり離島ってすごい。一ヶ月じゃぜんぜん潜り足りなくて、

帰りたくなくなっちゃう」嘆くわたしの肩に、  
壮太の手が乗った。  
「就活はこの島のダイビングショップにした  
ら？ たとえば、うちの店とかさ」  
「それは無理。だってわたしには、壮太みた  
いなホスピタリティないからね。ここにはず  
っといたたいけど」  
「だったら、違うシュウカツをこの島にする  
といいんじゃない」壮太との会話に、喧騒を  
もすり抜ける、澄んだ声が割り込んだ。  
わたしは正面に座る青年に視線をふった。  
天井から糸で吊ったように、まっすぐ伸びた  
背筋。女性と比べても華奢な首。水彩画の瑞々  
しさに、鳥の羽の軽やかさを足したような姿  
なのに、無垢な瞳には圧を感じるくらい力強  
さがある。もしじっと見つめたら、訳もなく  
涙が滲んでしまいそうなくらいの。  
「清孝」

壮太の声音でわたしは、それが気に食わな  
い人間に対しての、嫌味を含んだ言葉だった

のだと気がついた。

窘められて清孝は、淡い褐色の目をわずかに伏せた。

隣の席で酒に酔った男たちの笑い声が爆発した。驚きに思わず体を揺らしてしまったが、彼はまるで動じない。店中が一体となつてしまふような、人のあいだに隔てのない居酒屋の中で、彼だけが見えない膜で包まれているみたいだ。

「ただの意見だよ」

平然と放った言葉は壮太にだけ向けられている。さつきから、会話をするたびにこんな調子では、ここにいることを否定されている気分になつてくる。

清孝の取り皿には青い鱗が鮮やかなイラブチャーの刺身が一切れと海ぶどうが二、三のついているだけで、箸は行儀よく皿の隅に置かれたままだ。視線は常に壮太に注がれていて、わたしなんて空気みたいな扱いだ。

創作の参考にするのか、清孝は画像を指で

送りながら、壮太から海中のようすを聞いた  
がった。まるで壮太の目に映るものを描こう  
とでもしているように、詳細に。打って変わ  
った優しいげな声を聞きながら、わたしは悶々  
としていた。  
清孝は、わたしの何が気に入らないのだろ  
う。憧れの人に会えた興奮で、頭の線が切れ  
たみたい。絵の話ばかりをしてしまったのが  
いけないかったのだらうか。それとも素人に褒  
められることが、本格的に絵を学んでいる人  
にとっては不愉快なことなのだらうか。  
人柄の輪郭すらも掴めないから、どう考え  
たって理由はわからない。それならもう、で  
きるだけ話に加わらないようにして、この場  
をやり過ぎそう。そう決め込んで、目の前の  
泡盛をばかみたいに呷った。  
「この写真。住処のサンゴを守るために、自  
分よりも何倍も大きい相手に毅然と立ち向か  
っていく、オオアカテンサンゴガニの勇姿は  
感動的だったよ。そういえば、これを見つ

たのも千波だったね」

壮太が画像を送りながら、話を振ってきた。相槌を打ちながら耳を傾けていた清孝の口角が下がった。

「赤の水玉模様が鮮やかで、サンゴに隠れても目に留まるくらいだから。あそこにいたら誰でも見つけられたと思う」

かなり控えめな発言に留めたはずだった。

それなのに「へえ」とつぶやいた清孝の声から、ずっと熱が抜けてく。それから、

「自分の見ているものすべてが正しいと思えるなんて、幸せだね」彼はどこか皮肉めいた口調で言った。

「どういう意味」

それには答えずに、清孝はさらに質問をかぶせてくる。

「君の言う『誰でも』の中に、僕は入ってる？」

わたしにはその言葉の意味もわからなかった。それでも「当たり前前よ」と答えると、清孝は返事もしないまま、グラスに唇をつけた。

なにかが可笑しくて仕方ないといったようす  
で目を細めながら。  
「ナイチンゲールは目を潰したほうがよく鳴  
く、って言うものね。僕は、きみからずっと  
そう言われ続けている気分だよ。壮太からな  
にも聞いていないの？」  
「いつの間にか、賑やかだった居酒屋が、時  
が止まってしまったかのように静まり返って  
いる。  
隣の席にいた見ず知らずの中年男性が、清  
孝の隣に座って泡盛を勧めた。取りなそうと  
しているのか、明るい口調で身の上話を語り  
だしたが、わたしにはもう、他人の話に耳を  
傾げる余裕なんてない。怒りと悲しみでない  
まぜになった感情を、蓋で押さえつけるので  
精一杯だ。  
わたしはバッグを取って席を立った。清孝  
が何を言いたいのかはわからない。けれど口  
調や、言葉選びひとつひとつから感じるあか  
らさまな悪意に、向き合い続けることはもう

出来そうになかった。  
もうこのまま帰ってしまったおとうと、ドアに向  
かったそのときだった。後ろから左腕を強く  
引かれた。壮太だ。ふとからだ近づいて、  
耳元に抑えた声がした。  
「清孝には赤が見えない。先に言っておくべ  
きだったかもしれない。でも、いつもはああ  
じゃないんだ。あんなふうに言うやつじゃな  
い。ほんとごめん」  
頭を下げる壮太を突っぱねながらも、わた  
しは内心動揺していた。けれど、いま清孝の  
事情を聞きたいとは思えなかった。いつもは  
ああじゃないというのなら、単純にわたしの  
ことが気に入らないということなのだ。  
「帰るね。わがままでごめん」  
わたしは財布から五千円札を取り出して、  
壮太に押し付けた。  
店を出ると、まっすぐ宿に向かった。観光  
客でにぎわう島髓一の繁華街を抜け、海沿い  
の道に出た。地平線に残った茜色の筋が、星

の浮かぶ群青色に押され始めている。  
サンダルがアスファルトの上の砂を蹴る音  
だけが、むなしく耳に届く。何度もくり返す  
それに耳を傾けるうちに、頭を埋め尽くして  
いた黒い感情が、外へ追い出されていく。  
わたしは足を止めた。立ち尽くしていると、  
湿気を帯びた夜風が、少しずつ心を冷静にさ  
せてくれる。  
ある一定数、色弱と呼ばれる人たちがいる  
ことは知っていた。けどまさか、清孝がそ  
れだとは思ってもみなかった。だって彼は、  
あんなに細やかに色を描き分けることができ  
るのだから。バッグからスマートフォンを出  
して、インターネットで検索をかけた。  
カラーペンのセットが二つ並んだ画像が見  
つかった。左は六色、わたしにはそう見える。  
右は青とセピアのグラデーション、清孝の目  
にはこんな風に見えるのかもしれないという  
衝撃。

人の目は、世の中に溢れるあらゆる色を、

三色の組み合わせとして捉えている。その中のひとつが見えないということが、世界をまるで違うものに変えてしまうとは、思いもしなかった。もしかしたら、清孝があれだけ繊細な色づかいで絵を描けるのは、見えないものを補おうとし続けて、感覚が研ぎ澄まされているからかもしれない。清孝が鳥の鳴き声にたとえて言った自虐の言葉に、今さら胸が締め付けられる。わたしは海岸に降りて、誰もいない砂浜を見下ろした。蒼い飛沫をつくりながら波が押し寄せて、音もなく引ききるより早く、さざなみが重なる。規則の中にある不規則が、やがてひとつの大きな規則になっていくのだと気付く。目を閉じてすべてを聴覚だけに委ねると、心が風いで生々しい心の傷が癒されていく。わたしは顔を上げた。吹きめぐる潮風が頬を打つ。水平線にはまだかろうじて光が残っ

ている。  
清孝の目には、この島の夕焼けはどう映るのだろう。海岸から見える星空は。透き通る深い海の青は？　すべてを飲み込んでしまいたい。そんな漆黒は。  
重い頭を持ち上げて、ゆっくりとからだを起こした。午前八時。海に潜る日なら、もうとつくに壮太が迎えに来ているけれど、今日は休みだ。  
わたしはぼんやりとした頭を覚醒させようと、顔を洗った。洗いたてのタオルで包み込んで息をつき、鏡と向き合う。ここに來てから毎日が楽しくて、自分が生まれ変わったような気さえしていた。それなのにわたしはまた、東京にいた頃の難しい顔に戻ってしまった。ている。  
笑え、千波。  
わたしは頬を親指と人差し指でつまんで横に引っ張った。無理やりにも笑顔を作らな

いと、嫌な思い出ばかりがぼこぼこ湧き出してきてしまうから。髪をまとめて、いちばん高いところでお団子をつくる。ビタミンカラーのショートパンツに足を通して、うるさいくらいハビスカスがプリントされたTシャツを着たら、元気が出てくる。財布片手にビーチサンダルを引っ掛けて、表に出してみる。空の広さに、胸がすっとする。眩しさに、手のひらを翳した。空気をめいっぱい吸い込んでから、両腕を伸ばして息を吐く。自然には人を癒す力があるのだ。この島に来てから、強くそれを感じる。ガジュマルの並木道を進んでいくと、毎朝お世話になっている、鈴原商店が見えてきた。昨日はご馳走を前にいろいろと食べそびれてしまった。そのせいなのか、今日はなんの惣菜パンが並んでいるかを考え出したとたんに、お腹がすいてきた。

店の前にはビーチパラソルとプラスチック

のチェアが二客。そのうちのひとつは珍しく人がいる。眠っているのか、夏の終わりのひまわりみたい。首が倒れている。近づくと足音に反応したのか、垂れていた頭が、ぐんと持ち上がった。――あ――顔を見てぽろりと声がこぼれ落ちた。清孝だ。――昨日はごめん――啞然としているわたしを見上げたまま、彼が言う。――壮太に無理やり来させられたのだろうか。それとも一晩明けて、彼自身何か思うことがあったのだろうか。心の隙を見せないように視線を返すと、清孝が目を伏せた。昨日のとげとげしさはどこへ行ってしまったのだろうか、まるで別の人間のようにだった。――わたしこそ、ごめんなさい――頼りない顔を見せられたからか、わたし自身驚くような言葉が出てきた。そして、微妙な間が持たなくて、つい朝の散歩に誘ってしまった。今にも音を立てそうなおなかを押さ

えながら。どうせ断られるに決まっている。  
そう思っていたのに、清孝はわずかに顔を綻  
ばせて立ち上がった。  
鈴原商店で買い込んだ、惣菜パンの入った  
ビニール袋を提げたまま、わたしたちはあて  
もなく歩いた。  
沈黙に飽きたのか、清孝はこの島を訪れる  
ようになつた経緯を、ぽつりぽつりと話し始  
めた。十歳の頃、親に連れてきてもらつたの  
が一回目。そのときに仲良くなつた壮太と遊  
びたくて、それから毎年、夏休みの一週間で  
この島で過ごすようになったこと。壮太は、  
はじめて清孝に海の世界を教えてくれた人ら  
しい。  
「僕はあまり外で遊ぶほうじゃなかったから、  
夏休みに壮太と過ごす一週間は、毎日が冒険  
みたいだった」過去を懐かしむように、清孝  
が目を細めた。  
「壮太は、子どもの頃から海のガイドだった  
のね」わたしは注意を払いながら相槌を打つ。

彼の狙いが何なのか、まだわからない。  
「東京に戻ると、水族館に行くんだ。壮太か  
ら教わったものを探そうとするんだけど、い  
つも見つからない。目が醒めるような青は、  
ここの海にしかないっていうことに気付くん  
だ」  
そこまで言って、清孝は足を止めた。それ  
から生い茂った熱帯の木々の間にできた天然  
のアーチから、海を見やった。この道をつき  
進めば、ビーチに出られそうだ。  
わたしはアーチをくぐると清孝もついてき  
た。誰もいない朝の海。朝食の場所は決まっ  
た。砂浜に腰を下ろす。ビーチサンダルを脱  
いで足をまっすぐ伸ばすと、ときどき打ち寄  
せてくる波が、砂の中の踵を沈みこませてい  
く。  
「千波は海を見ると潜りたくなる？」清孝が  
訊いてきた。初めて名前と呼ばれて、驚きで  
胸が跳ねた。  
「清孝は？」わたしもさりげなさを装って、

彼の名前を呼ぶ。

「どうだろう」

「壮太と何度も潜っているんでしよう？ 海

が恋しくならないの？」

「なるよ。でも、複雑だ」

「なぜ？」

「壮太が見せたいと思うものを、僕には見る  
ことができないから」

地平線に視線を投げる横顔に、胸がちくり  
と痛む。何か言葉をかけたくて唇を開くけれ  
ど、なんて声をかけたらいいか思い浮かば  
なくて、わたしは彼の言葉を待つ。

「色彩っていうのは僕にとって暗記科目だ。

信号は左から青、黄、赤。ピンクもグレイも  
同じ色だけど、男だからピンクのラッシュユガ  
ードは着ないだろう、とか。熱帯魚の色もそ  
う。僕はいつも、誰かの目と知識に頼って生  
きてる」

「じゃあ、あの海の絵は」

「壮太が目になってくれた。僕でその



両手の人差し指と親指をL字にし、組み合わせてかぎカッコを作った。清孝は、長方形のあいだから景色を覗き見るように言ってきた。わたしは華奢な指で作られた長方形の枠に顔を寄せた。白い砂浜、日差しを受けて宝石のようにきらめく海。沖は風があるのか、リーフに白い波が立っている。

「ここから、何が見える？」清孝がわたしの方に首を傾けてきた。

「海、と：：空の青。砂浜？」わたしはしどろもどろになりながら答える。

「手前にはサンゴ礁の死骸とか、流木もある。むしろそっちの方がここから近い場所にあるのに、千波の目には映らない」

清孝の指にもう一度顔を近づけて、よくよくと眺める。たしかにそうだ。海のコンディションンまで気にしていたというのに、すぐそこにあるものが目に入っていなかった。

「アンカーを意識しながら海の景色を楽しまないし、インコを見るととき、鳥かごの金網が

何色だとか、気にならないものだけ。意識を向けているもの以外って、人の目には留まらないんだ。そういう自分だけの感覚を、いちばん素直に表現できるのが絵なのかなと思う

「清孝は腕を下ろして、わたしから距離を取った。」

「これは昨日の話になるけれど。潜ったときに千波が珍しい生きものを見つけてるのは、偶然じゃない。千波だから見つけられたんだと思う」

触れてはいけないと避けていた居酒屋での会話を、彼は自ら持ち出してきた。今は不思議と、清孝の言葉をまっすぐ受け止められる。また傷つけられるのではないかと不安だった気持ちには、いつの間にか潮風にさらわれて、彼方まで飛んでいってしまったらしい。

一緒に朝食をとりながら、わたしは自分の話をした。就職活動から逃げるように、大切な時期にここへ来てしまったこと。自分の未

来が見えないことが不安で仕方なくて、なにも希望を持ってないこと。そんな気持ちで過ごす今という時間が、限りなく無駄に感じてしまいい、そんなときに出会った『紺碧のサンクチュアリ』に、心が強く揺さぶられたこと。「わたし、見てみたい。清孝の目に映る世界や、色を」

素直な気持ちを伝えると、長いまつげに縁取られた瞳がわたしに向く。真摯に耳を傾けてくれている。「昨日の夜、いろいろ考えたんだけど、みんな他人の見ている世界ってわからないんだよね。だから、正解なんて誰も知らないのかも。世の中ってなんでも多数決だけど、もしかしたらみんなが見ているものがおかしくて、正しいのは清孝かも。清孝の目は神様からのギフトなのかもしれないよ」

「面白い考え方をするね」彼はパンをかじりながら、笑いをかみ殺している。

「清孝は何をどんな色で塗っても、いいんだ

と思うよー

それには何も応えずに、思いを巡らせるように遠く視線を投げる。もしかしたら清孝は、絵の色彩をほめられるたびに、心のどこかで自分の世界が否定されたような気持ちになっていたのかも。そうだとしたら、絵を描いている以上葛藤が影のようにつきまとう。清孝は、それをどうするつもりなのだろう。

食事を終えると、わたしたちはまばゆさを増していく海を眺めた。熱くなっていく砂浜に両手をついてからだを倒し、斜め後ろからそっと彼の横顔を見つめる。

「どうして、こんなにたくさん話をしてくれたの」

わたしはずっと疑問だったことを口にしてみた。

「きみがどういう人なのか、知りたくなったから」

昨日のわたしのどこにそんな要素があった

というのだろう。記憶を抹消してしまいたい  
くらい、自分のことばかりしか考えていなか  
ったのに。  
清孝はいたずらっぽく微笑んだ。からかわ  
れているのだ。すぐに気付いたけれど、こう  
やって親しい友人同士のように、当たり前  
話ができることが嬉しかった。  
「それで、わかった？」  
「少しはね」  
清孝は片手をついて、ゆっくりと立ち上が  
った。  
「わたし、明日最後のダイビングなの。壮太  
に、紺碧のサンクチュアリの舞台につれてっ  
てもらおう約束なんだ。もちろん、コンディシ  
ョン次第だし、ポイントに必ず行けるとは限  
らないんだけど」  
「僕も行く」  
まだ誘ってもいないのに清孝はそう言って、  
座ったままのわたしに向かって手を差し伸べ  
てきた。

ここ数日の中で、いちばん風の強い日だった。ボートが沖に出て揺れがきつくなると、清孝は海をじっと見つめたまま押し黙った。今年一本目のダイビングで緊張しているのだろうか、話しかけると笑顔を見せてくれるけれども、表情は硬い。少しでも緊張をほぐそうとして側についていると、操縦席の壮太から声が掛かった。

「たった一日で、どうやってそんなに仲良くなった？」

「わざわざ小声で訊いてくる。」

「ひみつ」

「ふうん」

意味ありげなつぶやきを残して、壮太は海に目を向ける。離岸してから三十分が経つ。目的地はもうすぐだった。

旅行最後のダイビングは、島の沖にある海底洞窟だ。トンネル、ドーム、延々と続く複雑な地形と、大物に遭遇できる確立の高さから、島きつての人気エリアになっている。ボートをポイントに停泊させると、わたし

私たちは海でのルールと器材をもう一度確認してからエントリーした。目の前が、青に飲み込まれていく。腕に巻いたダイブコンピュータで水深を測る。五メートル、十メートル、海の底はどこまでも透き通っていて、秋の日差しを通していている。透明度は抜群だ。緩やかに群れを成す熱帯魚を眺めると、ようやくいるべき場所に帰ってきた、そんな感覚に包まれる。わたしは清孝の手を取りながらあとを追う。リーフの裂け目に沈んでいき、ライトを点した。深い、深い青。迷路のような細い道。海底に転がる角の取れた石。自然がこれを造ったというのなら、気の遠くなるような年月が必ずあったに違いない。油断すると頭を擦りそうなくらい、天井の低いトンネルを潜り抜け。先に、やさしい光が降り注ぐホールがあつた。何時間でもそこにいられそうなほど、静謐で幻想的な空間だ。

全部の時間を使って、まどろむようにたゆたっていたかったが、目的の場所はまだ先のようにだ。行くよ、と清孝から肩をたたいて合図される。今度は彼の手がわたしの指先を掴んだ。

右へ折れ、左に折れて、そこに住む魚たちと一緒にになって、トンネルをいくつも抜けていく。冒険の先で目にするであろう光景を想像して、胸の期待が膨らんだ。やっと憧れの絵の世界に入ることができるのだ。わたしは無意味に清孝を振り返った。手が触れていると心が伝わってしまったのか、マスクの奥の目が笑った気がした。

向かう先が徐々に明るくなっていき、光の降り注ぐホールに出た。青い光に照らされて、銀色の鱗を星のようにきらめかせているのは、菱形のシルエットが愛らしいリュウキュウハタンポの群れだ。心の中で感嘆の声を上げる。清孝の手がふと離れた。彼は、降り注ぐ光の中に向かい、真上を仰いでいる。魚たちは逃

げるでもなく、清孝を受け入れている。  
壮太がすかさずカメラのシャッターを切った。半分仕事、半分遊びのわたしたちとのダイビングは、ブログ用の写真を撮影するのにうってつけなのかもしれない。このホールで少し自由時間を取るようになった。  
わたしも近くで面白そうなものを探そう。広いホールを進むと、いつの間にかすぐ側に戻ってきていた清孝に肩を叩かれた。差し伸べられた手につかまると、清孝が岩間に見える赤い魚の群れを指している。もしかして、あれが絵のモチーフになった魚だろうか。側に寄ってみたが、岩陰にびたりと沿うように密集していて、せつかくの美しい赤に光が当たらない。  
清孝がもう一度わたしの手を引いた。トンネルの向こう側、光の中にまた赤い魚が見える。近くへ行くには、ホールを出なければならぬ。壮太に伝えたほうがいいのかと思つたが、彼は今、岩場に体を沿わせて、マクロ

写真の撮影に夢中になっている。清孝の手が離れた。一人にするわけにもいかず、わたしは仕方なく、彼のあとを追った。そのトンネルの先は、ホールではなかった。道の切れ目から見下ろす景色は圧巻だ、崖の上から谷底を見ようとしているみたいだ。わたしたちが今いる場所が海底だったはずなのに、大地の割れ目といっても大げさではないほど、果てしなく深い亀裂があって、海はどこまでも続いている。悠然と泳ぐ大型魚の群れの脇を、色鮮やかな熱帯魚がするりと抜けていく。上下左右すらわからなくなりそうなの、見渡す限り青の世界で、渋谷駅前のスクランブル交差点みたい、いろいろな種類のたくさん魚たちがひしめいている。写真の収まりが良い洞窟よりも、果てしない広さの中、それぞれが自らの存在を主張し、それでいて溶け込むことが当たり前前に生きている世界、わたしはそんな夢のような場所に強く焦がれているのかもしれない。

もしかしたら清孝があゝの絵で描いたのは、この海だったのかもしれない。ふと、隣に目をやった。清孝は眠っているように、ぴたりと瞼を閉じている。この世界を心の中に留めようとするように。

わたしももう少しだけ、ここに浸りたい。しばらくの間、巨大な命の流れに心を溶かしている。と、視界の彼方を、ひとりのダイバーが横切った。別ルートでここまで来たのだろうか。不思議に思いながら眺めていると、彼は何の躊躇いもなく魚の群れの中に突入した。そんなことをしたら、魚たちは散り散りになってしまわずなのに、彼は受け入れられていく。まるで、海の生きもののように。

おいで。わたしは彼から、そうやって呼ばれた気がした。とたんにからだが軽くなった。エアが必要ないくらい、海に親和しているのがわかる。紺碧のサンクチュアリへ身を任せようとしたそのときだった。

鮮やかに輝いていた、色とりどりの魚たち

から急に色が失せてしまった。何かが変だ。急に胸のあたりが苦しくなってくる。誰かの手が急にわたしの頭を押さえつけて、口の中に硬い何かを押し込んできた。恐ろしくなってもがいていると、エアの呼気音が、からだの内側から響き出した。

目の前に壮太がいる。あのダイバーは？探そうとしてあたりを見渡し、ぞっとした。いつの間にも、トンネルの外に身を投げ出していたのだろうか。足元は、大型魚が群れをなす、底の見えない濃紺の入り口だ。わたしは壮太の腕に捕まった。口に押し込まれたのはレギュレーターだった。いつのまに大量消費したのか、エアの残量はほとんどない。それでも壮太からオーケーのハンドサインを返されると、心が少しづつ落ち着いてきた。

あのスポットは、一度見たら忘れられないほど雄大な景観を楽しめるが、流れが速いこ

とが多く、状況をよく見極めずに近づくと危険な場所らしい。もしあのとき、壮太が来るのがあと少し遅かったら。わたしは下降潮流に捕まって、海の底へと引きずり込まれてしまっていただろう。

三人集まると、安全な場所から浮上した。陸が恋しいなんて思うのはこのときが初めてだった。

今、壮太はわたしと海を切り離そうとして、全速力でボートを岸に向かわせている。未だに足の震えが止まらないわたし側には清孝が寄り添って、手を握ってくれている。

「ダイバーが魚の群れの中に来て『おいで』ってわたしを呼んだの」

ダイビングでは必ずバディを組む。だから、漂流でもしないかぎり完全にひとりきりになるなんてことはないはずだ。冷静に考えれば、その時点でおかしいと気付けるはずなのに、奇妙な高揚感に包まれて、まともな判断などできなかつた。

「わたし、死ぬかもしれないなかつた」

その言葉を口に出すと、涙があふれてきた。

清孝は、骨が軋みを上るかと思うほど、わ

たしの手を強く握った。

「千波は死なない」

「なぜ」

「壮太がかならず君を助けるから」

そう言った清孝の瞳は揺れていた。

「あの場所の流れが速いのは知ってたんだ。

だからもし僕があるときずっと、こうやって

千波の手を握っていれば」

わたしの身投げを防げたと言いたいのだろ

うか。だったら、なぜそうしてくれなかった

の？ 問いただしたい気持ちもあったけれど、

何もかもを忘れて海の世界に浸っていたわた

しには、彼を責めることなんてできやしなな

った。それにあときは、一種のトランス状

態だったのだ。

「清孝のせいじゃない」

気持ちに嘘がないことを伝えたくて、手を

強く握り返したけれど、清孝はゆっくりと首を横に振った。

「今年はまだもうこの島には来ないつもりだった。だけれど、初めてだったんだ、壮太からいつ来るのかって訊かれたのは。たったそれだけで舞い上がっていた自分を殺したくなかった。壮太が僕を呼んだのは、千波を喜ばせたいがためだった、って知ったあとにはね」

どうして今その話をするのだろうか。考えたときに、答えがたった一つしか見つからなくて困惑した。

「君と会わなければ、ずっと気づかずにいられたのに」

苦しさを吐き出すように言葉を紡ぐ清孝に、わたしはなんて声をかけたらいいかわからなくなってしまうた。

その晩は、鉛のようにからだが重くて、わたしはホテルから一步も外に出ることができなかつた。旅行中には絶対に見るまいとして

いた、友人のSNSに目を通す。就職活動からの逃避をしにきたのに、それがうまくいかなくなると思いついて、いやだと思いついて、現実の方へとベクトルを変えようとするのだから、皮肉なものだ。

わたしはベッドの上からだを投げ出して、仰向けになった。どこまで行っても、結局逃れられない。すべては自分の心次第なのだ。毎秒進んでいく時計の針を見て、この旅の終わりが近づいていることを実感する。重いため息を吐き出したとき、スマートフォンが震えた。壮太からの着信だ。わたしの体調を気にかけてくれているのだろう、通話キーに触れると案の定、心配そうな声がした。

「千波、具合はどう？」

「元気とは言い難いけど、大丈夫。ちゃんと生きてるよ。息もしてる」

「どうやらそれは笑えない冗談だったようだ。いつもは気持ちにむらがない壮太が黙ってしまった。一拍置いて、予想外の言葉が飛んで

きた。

「いま、清孝もそこにいる？」

「来てないけど」

「それならいいんだ。ごめん」

「よくない、どうしたの。清孝に何かあった？」

「いや、別にどうということじゃないんだ」

「教えて。気になるから」

「あのととき千波がどういう状況だったのか、

詳しく訊いておきたかったんだけど、連絡が

つかないし、部屋にもいないみたいだったか

ら。二人は宿泊先が近いから、もしかして、

と「思っ

「探しにいつてくる。見つけたら電話するか

ら」

「どうして清孝がわたしの部屋にいますか」

「のだらう。壮太の鈍感さが恨めしくもなっ

「くるが、今はそんなことにケチをつけている

「場合ではない。」

「ビーチサンダルを引っ掛けて、あわてて外

「に飛び出した。アスファルトを蹴ろうとして

も、足だけが別人みたいに言うことをきいてくれない。壮太が近隣の飲食店を回るあいだ、わたしは海岸を探すことにした。初めに向かう場所は考えるよりも先に決まっていた。昨日の朝、清孝と話をしたビーチだ。もちろん、彼がそこにいるとは限らない。だけどわたしは、清孝にそこについて欲しかった。足にエンジンがかかり始めると、怠けていた頭が回転し始める。会ってからたった三日の友人だ。短い時間の中で、傷つけあってしまったけれど、誰にも言えない、分かり合うことができないような親密な話だっっている。清孝がダイビングでわたしにあの光景を見せた裏に、どんな想いがあったのかは、今はつきりとわからない。だけど、あの場所で清孝にかけてた言葉が、彼の胸にまっすぐ届いていたという確証が欲しかったし、たとえどんな

なことがあったとしても、清孝のくれた言葉  
がわたしにとって変わらない、かけがえのな  
いものだということをお伝えした。  
わたしは信じられる確かなものを、あの海  
辺に求めているのかもしれない。だからもし  
あの場所で会うことができたなら、今でもき  
つと言葉が届くと思えるのだ。

「ここだ」

星空の浮かぶ空。藍に染まった天然のアー  
チ。青ざめた月が、海までの、光の道を作っ  
ている。わたしは木々の間をすり抜けて、海  
岸まで駆けた。いない。

「清孝！」

いるかどうかともわからないに、わたしは  
喉が張り裂けそうなほど叫んでいた。彼に伝  
えなくてはいけないことは、たくさんある。  
ひとつひとつの言葉を、しぐさを思い返すほ  
どに、湧き出してくるのだ。

清孝の口から当たり前のようにでた冗談、  
シュウカツは、もともと彼の頭の中にあっ

言葉だったのではないだろうか。

もしかしたら清孝が、潮の流れの速さを知った上で紺碧のサンクチュアリに行こうとしていたのならば、自分自身が生かされるかどうかを試そうとしたのではないだろうか。不安になると想像がつながって翼をつけ、悪いほうへと飛んでいく。

上半身を屈めて両膝に手のひらをつき、呼吸を整える。後ろから、さくさくと砂を踏みしめる音がした。

「馬鹿だね、千波は」

潮風に乗って、澄んだ声が聴こえてくる。清孝だ。わたしは駆け寄って、折れてしまった。そう、華奢なからだをきつく抱きしめた。

「どうして壮太の電話にでなかったの。心配したんだよ」

「……見殺しにされかけたの？」  
「耳元に、息がかかった。」

「違う。ほんとうはあなた自身が……。清孝

は、もし自分が目の前から消えてしまったら、

壮太がどれほど苦しむかを、考えたことないの？」

その言葉に、清孝の胸がゆっくりと上下した。わたしの背中に、力が抜けたままの腕が回される。耳元に呼気を感じながら、どれだけの時間が過ぎただろう。清孝が口を開いた。

「人生は一度きりだっていうのに、人はわがままになれないよね。千波を知ったとき、君を利用すれば、自分勝手になれるかと思ったの。ぜんぜん自由になんてなれない。苦しただけだ」

「聞いて、清孝。壮太は誰よりも清孝の絵が好きだよ。だから、自分が本当に大切にしているものを褒められて嬉しかったから、感動をわたしの口から直接伝えさせようとして、清孝を呼んだんだよ」

「そういう気持ちも少しはあったかもしれない。でも、千波はずっとこの島にいた。そのあいだ僕には、声もかからなかった。もったいなく僕を呼ぶことができたはずなのにそうし

なかつたのは、君とふたりで過ごしたかつたから。壮太のことなら、僕のほうがよくわかっている」

詰まっってしまった言葉の代わりに、涙がぼろぼろと頬を伝っていく。

「壮太が千波を好きな理由は、海の生きものを好きな理由とは少し違うみたいだね」

「でも、わたしは」

清孝が好きだ。でもその気持ちを、たった二文字の単純な言葉では言い表すことはしたくなかった。

やさしい手が右頬に触れた。想いに気づかれている。避けることもできないまま、わたしはただ唇を触れ合わせた。

「ごめんね、千波。でも千波ならきつとゆるしてくれよね」

それからわたしを開放すると、清孝は海にからだを向けて大きく伸びをした。どんな変わり身か、瞳には、会ったばかりのときのような力が宿っている。

「僕は明日東京に帰るよ。その前に、もう一度この海に来たかったんだ」

わたしは早朝かかっていた、壮太からの電話でたたき起こされた。外に出る支度を済ませたころに車が迎えに来て、訳もわからないまま壮太の家に連れて行かれた。

「朝起きたら、この有様だった」

彼はわたしを自室に案内するなり、白い壁の中央に飾られた、紺碧のサンクチュアリを指した。それを見て唾然とした。この島を訪れてすぐに見せてもらった、美しい色彩を誇っていた海の世界は、どこにもない。キャンバスは一面青に染まっている。

「どうしたの、これ」

「清孝だよ。目が覚めてこの青を見たとき、別の絵でも飾って帰ったのかと思った。だけど冷静に考えれば、清孝が空港についたときにこんな巨大な荷物は持っていなかった。慌てて部屋を探してみたけど、案の定あの絵が

どこにもない」

昨日、ふたりはこの部屋で一晩を過ごした  
ようだ。「明日の朝帰るから」と、清孝は東京  
から買ってきた土産をホテルに一度取りに帰  
ったらしかつたが、どうやらそのときに、ア  
クリル絵の具を鞆に忍ばせてきたようだ。  
「ああ、わかつた」わたしの頭の中で、パズ  
ルが解けた。

「なにが」  
不機嫌な壮太の質問には答えずに、わたし  
は一人笑いした。あの夜に言われた「千波な  
らきつと、ゆるしてくれるよね」は、このこ  
とだったのだ。心の中すでに決めていたに  
違いない。

あの絵は、わたしがここに来た理由のすべ  
てだった。軽い窒素酔いから錯覚まで見てし  
まうほど心酔していた、憧れの海の世界だっ  
た。その原画から命の息吹を感じるものがで  
きないのだと思うと、当然残念な気持ちはあ  
る。けれどもなぜだろう、胸に空いてしまった

風穴に、気持ちのよい風が吹き抜けているのは。  
「壮太、よく見て。めちゃくちゃに塗りたくられてるわけじゃない。すごくたくさんの青が重なってる」  
壮太を酔い潰してから絵を描き始めたのだろうか。キャンバスをよく見れば、単色に見えたそれが、狂気に冒されたように緻密な、青のグラデーションだと気づく。  
「もしかしたらこれは、清孝の『紺碧のサンクチュアリ』かな」壮太が口元に手を当てて唸った。  
「清孝の目は、他人よりも青に敏感なんだ。たぶんおれたちが同じにしか見えないうような色を識別できてる」  
わたしはもう一度、壁にかけられたアクリル画に目をやった。してやられた、と思った。これまでと立場が正反対だ。そういえば清孝は、東京にはこの島と同じ青はないと言っていた。彼の目にはどんな色が映っているのか

と、あらためて訊いてみたくなった。

壮太は腕組をして、眉をしかめた。

「今度、東京に行こうと思う。さすがにこれ

は、顔を見て文句を言わないと気がすまない。

清孝の海が気に入らないとかそういうことじ

やなくて……、おれがどれだけ、前の絵を気

に入ってたか知ってたはずなのに。新しいキ

ャンバスに描くとか、何かほかに方法があつ

ただろう」

でもきつと、そうしなかつたのは清孝なり

にたくさんの理由があつたからなのだ。わた

しも、葛藤を乗り越えて前に進まないといけ

ない。

同じものを見ていても、誰の目にも同じよ

うに映るわけじゃない。それはどうやら、絵

だけの話ではないようだ、気づかされてし

まったから。

「笑ったらおなかが空いちやつた。寝起きで

引きずられてきたんだから、朝ごはんお願い

します」

わたしが頭を下げると、壮太は盛大なため息をついて車の鍵を取った。清孝の海が、朝の日差しを受けてきらめいている。わたしは塗り替えられた新しい海の絵を心に留める。本当はまだ彼は空港あたりにいて、何食わぬ顔で雑誌でも読んでいるのかもしれない。だけれど、答え合わせはまた今度でいい。わたしたちの時間は、まだたっぷりと残されていくのだから。鞆をとって、わたしは一足先に家の外へ出る。遠くで波の音がする。両腕を高く上げて大きく伸びをすると、海の香りが体中に染み渡ってきた。

了